

# 労働映画百選通信 No.17 2017.04

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

## 日本の労働映画百選 <http://hatarakubunka.net/>

『明治の日本』(1897)から『下町ロケット』(2015)まで!“働く姿”を描いた百本をセレクト

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意義と喜びをどのように描いてきたのか。働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から百本を選びました。

## 労働映画鑑賞会

働く文化ネットでは、毎月第2木曜日に「労働映画鑑賞会」を開催しています。どなたでも参加できます。お気軽にご来場ください。

### 第38回 ~仕事の年輪、家族の歩み~

・開催日: 2017年 5月 11日(木) 18:00~ (参加費無料・申込不要)

・会場: 連合会館 201会議室 (地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

### ・上映作品 **新・喜びも悲しみも幾歳月**

1986年/130分 製作/松竹=東京放送=博報堂 脚本・監督/木下恵介

出演/加藤 剛 大原麗子 中井貴一 紺野美沙子 田中 健 植木 等ほか

国民的ヒット作となった【労働映画百選No.29】『喜びも悲しみも幾歳月』(1957年)の続編。昭和後期の灯台守夫婦とその家族の歩みを、抒情とユーモアで描いたヒューマン大作。



【DVD】松竹

【上映情報】労働映画列島！4月~5月 ※《労働映画列島》で検索！<http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00170503>

### ◎新作ロードショー

草原の河 《4月29日(土/祝)から 東京 岩波ホールほかで公開》

チベットで牧畜に携わる一家を描いたヒューマンドラマ。娘と父、祖父の心情が、厳しく広大な自然と共に映し出される。(2015年 中国 監督/ソントルジャ) <http://www.moviola.jp/kawa/>

トとふたりの姉 《4月29日(土/祝)から 東京 ポレポレ東中野ほかで公開》

ブカレスト郊外で暮らす10歳のトとふたりの姉。保護者のいない3人が必死に生き抜く姿を描くドキュメンタリー。(2014年 ルーマニア 監督/アレクサンダー・ナナウ) <http://totosisters.com/>

笑う招き猫 《4月29日(土/祝)から 東京 新宿武蔵野館ほかで公開》

山本幸久の小説を映画化。OLを辞めたヒトミと、家事手伝いのアカコ。芸歴5年、売れない漫才師コンビの青春ドラマ。(2017年 日本 監督/飯塚健) <http://waramane.jp/>



### ◎名画座・特集上映

【東京 神保町シアター】4/29~5/12「成瀬巳喜男 初期傑作選」…限りなき舗道/サーカス五人組/鶴八鶴次郎/他

【東京 池袋 新文芸座】4/29~5/8「ワーナー・ブラザーズ フェスティバル」…エデンの東/ダーティハリー/他

【東京 平井 小松川区民館】5/3~5「メシネマ祭'17」…ブラジルの土に生きる/早池峰の賦/ここに居るさ/他

【東京 京橋 フィルムセンター】5/13~21「よみがえるフィルムと技術」…煙突の見える場所/その場所に女あり/他

【東京 早稲田松竹】5/13~19「映画のなかの沖繩」…沖繩列島/やさしいこぼれ人/ウンタマギルー/夏の妹

【川崎市市民ミュージアム】5/13~28「新東宝70周年記念特集」…生きている画像/朝の波紋/たそがれ酒場/他

【高崎電気館】4/22~5/12「角川映画祭 part.1」…蒲田行進曲/探偵物語/麻雀放浪記/他

【岐阜ロイヤル劇場】5/13~26「東宝喜劇で観る 日本の高度経済成長期」…社長紳士録/喜劇 駅前大学

【大阪 十三 第七藝術劇場】4/22~5/5「イタリアネオ+クラシック映画祭2017」…わが青春のフロレンス/ゴモラ/他

【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】4/29~5/12「南インド映画祭」…事件番号18/9/オッパム~きみと共に~/ルシア/他

【京都 立誠シネマプロジェクト】4/29~5/5「マイナードイツ映画発見の旅」…辛ロソースのハンズー丁/嘘つきヤコブ/他

【神戸映画資料館】4/29~5/7「戦前日本映画蔵出し上映」…山の誓ひ/小島の春/結婚の生態/他

【山口情報芸術センター】5/3~7「ノンジャラン: 人生の達人」…人生フルーツ/皆さま、ごきげんよう/ホームレス

【高知あたご劇場】4/22~5/5『土佐の一本釣り〜久礼発 17歳の旅立ち』(2016年 監督/蔵方政俊)

【福岡市総合図書館 シネラ】5/3~27「中村登監督特集」…我が家は楽し/夜の片鱗/二十一歳の父/他

【天草 本渡第一映劇】4/29~5/5「天草名画座番外地2017」…トラック野郎 度胸一番星/ファンキーハットの快男児2

【レポート】第37回 労働映画鑑賞会「連帯を求めて、孤立を恐れず」(2017年4月13日)

今回は、「フツー」ではない労働環境に身を置く主人公が、労働組合の力を借りて「フツワーの仕事」を獲得する過程を描いたドキュメンタリー映画『フツワーの仕事がしたい』(2008年)を上映しました。

上映後、映画の取材協力をされた全日本建設運輸連帯労働組合(連帯ユニオン)の小谷野 毅 書記長にお越しいただいて、コメントを頂きました。

また、この映画の土屋トカチ監督にもお越しいただき、映画についてのお話を伺うことが出来ました。ご参加いただきました皆様、ありがとうございました。



【DVD-BOOK】旬報社

(小谷野さんのお話から)

- ・運動は遅々として進まない、忸怩たる思いだ。
- ・観た人から良くこれはフィクションではないかと言われることがあるが、全部実話であり、暴力団が出てくるなんてことは、我々の組合運動においては今でもよくある。
- ・建設運輸業界では、ゼネコンをトップに6次7次下請けは当たり前で、現場の圧倒的な人たちは下請けの人たちだ。この映画は、大会社にどうやって責任を取らせるか、何故それが必要なか描くことを目的に作った。なぜ彼らに責任があるのか、社会的にわかってほしかった。現状の責任が元請にあるということが、映像だからこそよくわかる。ブラック企業を使っている親玉が本当のブラック企業ではないか、責任のある大元をあぶりだすのが労働運動ではないか。



小谷野 毅さん  
(連帯ユニオン 書記長)

【作品ガイド】たった独りで「闘う」人への実践マニュアル

「これが当たり前だと思っていて…」。セメント輸送車の運転手として働く皆倉信和さんは36歳。大手メーカーの二次下請会社に勤務していた。首都圏では建設ラッシュが続く、頑張っている分だけ稼ぎになる仕事の筈が、運輸業界の規制緩和、ゼネコン同士の過当競争など様々な要因が重なり、労働環境はどんどん悪くなる。遂にはひと月の勤務時間が552時間に！一日あたり18時間労働、しかもオール歩合制だから、ちょっとでも休めば生活が苦しくなる。「バカらしくなった」皆倉さんは、たまたまもらった労働組合のビラに『ひとりでも加入できます』と書いてあったのを思い出し、相談に訪れるのだが……。



土屋トカチ監督

いまや労働組合の組織率は17.4%(2015年6月現在、厚生労働省)。組合との接点はもちろん、ストライキを見たことすらない人も増えている。非正規雇用は全体の4割近くとなり、職場でも「労働者の権利」を正しく理解している人は見当たらない。この映画は、そんな「私たち」の代表でもある皆倉さんが、たった独りで「フツワーの仕事」を求めて立ち上がった結果、どんな恐怖や苦しみを味わい、そしてどんな未来にたどり着いたかを教えてくれる実践マニュアルだ。

組合に加入した皆倉さんに対し、会社側は自称「会社関係者」の男を使って皆倉さんを脅迫、組合の脱退や「自己都合」の退職を強要する。支援に駆けつける組合員は旧知の土屋監督に「映像記録」を依頼。カメラは争議の一部始終に密着することになる。

映像には皆倉さんの変化がしっかりと映し出される。最初は「闘い」の当事者としての自覚もあまり感じられない表情だった。ところが、「会社関係者」による脅迫と暴行、母の急逝、体調を崩し難病を発症……大きな試練が相次ぎ、容貌は見違えるほど衰弱するが、彼の眼の中の光は、次第に強くなっていくのだ。

組合は一次下請会社とメーカーに改善を要求。両社とも責任回避を繰り返すが、実情を知ろうとしないメーカーの本社前に巨大なスクリーンが立てられ、アッと驚く「上映会」が始まる。それまでの形勢を一気に逆転させるこの展開は、納得のいかない状況にきちんと「声を上げる」ことの大切さを教えてくれる。

「組合」も「権利」も見当たらない職場で、たった独りで闘っている人に、ぜひ見ていただきたい。

土屋監督はその後も『ブラック企業にご用心！』(2013年)などの作品で労働問題を追究。現在、企業側のパワハラと闘う青年を追った『アリ地獄天国(仮題)』を制作している。(労働映画百選 作品解説より)

★DVD BOOK『フツワーの仕事がしたい』(旬報社、定価3,200円+税) <http://www.junposha.com/>

## 【作品ガイド】『デブラ・ウィンガーを探して』 Searching for Debra Winger

2002年/97分 アメリカ 監督/ロザンナ・アークエット

ハリウッドの個性派女優、ロザンナ・アークエットの初監督作品。「仕事と家庭の両立」などの問いかかけを、同業の女優たちとストレートに語り合っていくドキュメンタリー。



デブラ・ウィンガーを探して

【DVD】ポニーキャニオン

## ハリウッド女優たちも葛藤の、ワークライフ・バランス 文:清水洋子

この映画が日本で公開されたのは2003年。日本では男女雇用機会均等法施行から17年後。結婚して出産した「聖子ちゃん」が世界進出を志したら「育児放棄！」と激しいバッシングを受けた時代だった。夫だった神田正輝さんは「寛大マサキ」と揶揄されたものだ。しかしドッコイ、今どうだろう？娘のさやかちゃん(神田沙也加)は立派な大人になり、聖子ちゃんはく豊富な恋愛体験と結婚、幸せな母、充実した仕事すべてを手に入れた女性として、憧れの的になっている。

『グラン・ブルー』(1988)、『パルプ・フィクション』(1994)などでのコケティッシュな魅力で知られる女優、ロザンナ・アークエット。40歳を過ぎて家庭と仕事の両立をどうするか？個人的な問いを原動力に作られた作品だ。ロザンナは、母として子どもに寂しい思いをさせたくない、けれど仕事も充実させたい。その揺れ動く気持ちを率直にあらわす。そして他の女優仲間はどう折り合いをつけているのか？インタビューする。

映画に登場するのは34人の女優たち。妹のパトリシア・アークエットをはじめ、ハリウッドで燦然と輝くキャリアを持つ女優ばかり！『愛と青春の旅立ち』(1982)でオスカー女優にも輝いたデブラ・ウィンガーが、なぜ忽然と引退の道を選んだのか？というロザンナの気持ちは、ドキュメントを牽引する上でのポイントになっている。結論から言えば、華やかに見えるハリウッド女優たちも、ワークライフ・バランスに悩んでいた。悩みながら、それぞれ模索し、折り合いをつけている。

ロザンナは役者である前に、ひとりの女性だ。その飾らない性格、素直な問いかかけが、イメージを大切にしている女優たちの心を開く。『ピアノ・レッスン』(1993)でのホリー・ハンターの演技に感動したロザンナは、彼女に手紙を送ったという。ホリーは「そんな手紙を届けてくれたのは、あなただけよ」と言う。ロザンナの人柄をあらわす象徴的なエピソードだ。

妹のパトリシアはセクハラに憤り、ダイアン・レインは「子育てと仕事でくたびれちゃって、夫はないがしろ…」と嘆く。多くの女優が「年齢を重ねるほど仕事が減ってくるのよ。おかしくない？どうして、身なりも構わないお母さん役ばかりなの？整形したくなるのも、わかるわ」と不満をあらわにする。あのジェーン・フォンダでさえ「自分に正直になったら、仕事を失うかもしれない…」と漏らす。

ディレクターだった頃、わたしも女優さんと関わる仕事をしたけれど、シナリオに沿って、期待に応える別人になるというのは、役とは別の強い個人が確立されてないと呑まれるように感じた。体も心も世間の晒し者になる、孤独でタフな仕事とを感じる。

ウーピー・ゴールドバーグは、恋愛すると、いつの間にか恋人を精神的にも経済的にも支えてしまい、バカらしくなると答えている。意外だったのは、シャロン・ストーン。カジュアルなインタビューなのに、なぜ肩出しドレス？とは感じるけど、受け答えは正直！女優として有名だと、恋人がいじける。そしてジュリアン・ムーア(オスカーの授賞式を中座して、子供の学校へお迎えへ行ったらしい)やケイト・ブランシェットの演技を見ると、自分と比較して落ち込みまくると言う。けれど「彼女は彼女、わたしはわたし。人のマネをして張り合っても意味ないわ。GO! GO! きっと大丈夫って自分を励ますの!」。その表情がとにかくチャーミング。親近感が湧いた。

一方、表題にもなったデブラ・ウィンガー。工作上、不自然なことを強要され、女優業を辞める決意をする。ひとりの人間として湧き出る自然な声に正直になり、二の次にしていた暮らしを楽しむことを選んだ。うん、それもわかる。「正直、未練はある」と話していたデブラ・ウィンガーは、その後カムバックした。大好きな家族や恋人がいて、経済的に恵まれていても仕事をしたい。

そんな仕事の魅力を秀逸に言葉にしているのが、ジェーン・フォンダ。それは映画を見てのお楽しみ。気心の知れた友達と、仕事について話すのは気持ちが整理されるし、勇気が湧く。けれど、広がる未来から何を選ぶか？その結果、満たされるか？満たされないか？満たされなかったら、どうするか？その結果を引き受けるのは自分しかいない。LIFE GOES ON! 人生はつづく。自分にフィットするワークライフ・バランスを選ぶのは、自分しかいない。

しみず・ようこ…1967年生まれ。テレビディレクターとして26か国で労働。現在は主婦業とともに、福祉系NPOで労働中。

【労働映画のスターたち】第19回「大杉 漣」 文：百永良武

この世界の片隅に……「あるがままに」生きる、となりの中間管理職

「レンさん」こと大杉漣氏は、1980年代から現在まで、夥しい数の映画やテレビに出演している当代随一のバイプレイヤー。出演作はおよそ500本！北野武や黒沢清など、海外でも評価の高い監督たちが挙って起用しているので、2000年のオランダ・ロッテルダム映画祭では、

「オオスギ・レンという名の俳優は、一体何人いるのか？」という質問まで出た(三池崇史監督の回答は「3号までは確認できている」)。

物語を引っ張る主人公の傍で、作品の世界観を確かなものにするサブキャラクターには、「どこにでもいそう」なりアリティが求められる。レンさんが得意とする役どころを分類してみると、勤務先の直属の上司、学校の教頭、国際犯罪組織のナンバー2、そして花嫁の父(!)など、様々な集団の「中間管理職」的なポジションが多い。主人公が突き進むとする「理想」と、世界の「現実」との間に挟まれ、どちらを支持すべきか揺れ動く人物。その姿は、作品を鑑賞する我々自身でもある。近年は主演作も増えているが、いずれもヒーローではなく、「世界の片隅」に生きる平凡な人々だ。座右の銘は笠智衆の言葉《あるがままに》という、レンさんが演じてきた人物像を辿ってみよう。

1951年、徳島県小松島市の生まれ。高校卒業後に上京し、22歳で劇団「転形劇場」に参加。「転形劇場」は作・演出の太田省吾を中心に、能や舞踏への高い関心から独自の身体言語を探求し、「劇的」な世界とは対極の「沈黙劇」を生み出したことで知られる。レンさんは若手の看板俳優として活躍すると同時に、劇団の制作部員も務め、1988年の劇団解散までは、舞台活動に専念していた。

1980年、公演を見に来た人に誘われて、舞台の合間にピンク映画に出演するようになる。当時は高橋伴明、滝田洋二郎、廣木隆一など、意欲に溢れた若手監督が頭角を現してきた頃で、口髭を生やしていた青年レンさんは、二枚目も三枚目もこなせる演技力が買われ引っ張り役となっていく。周防正行監督のデビュー作『兄貴の嫁さん』(1984)は、全編で小津安二郎の映画にオマージュを捧げた異色作。レンさんは当時まだ33歳だったが、笠智衆を彷彿とさせる義父役を堂々と演じきり、その自然な「枯れ方」が高く評価された。

「転形劇場」の解散で、ホームグラウンドを失ったレンさんは俳優を辞めることも考えたそうだが、1980年代後半のレンタルビデオブームから生まれた「Vシネマ」が量産体制に入ると、今度はヤクザ組織の兄貴分役などで重宝される。北野武監督の第4作『ソナチネ』(1993)では当初、沖縄の抗争に「出張」する組長を見送る「留守番」の組員役に過ぎなかった。ところが、サラリーマンのように穏やかな口ぶりの男が、借金の取立てになると口調を豹変させる演技が北野監督に気に入られ、急遽沖縄にも「同行」することになり、たけし組長の気まぐれに翻弄される「中間管理職」として、どこか滑稽で哀しい作品のムードを支えた。北野作品にはその後も『HANA-BI』(1998)、『BROTHER』(2001)に出演し、「真顔のコント」とも評される独特のトーンに貢献した。

『ソナチネ』で世界的にもその存在を知られるようになってからは、年間20~30本のハイペースで出演作が続く。サブ監督『ポストマン・ブルース』(1997)での殺し屋のよう、一見怪しげな風貌だが人柄は誠実…というギャップを演じると、ご本人の「折り目正しさ」が絶妙の味わいを生んだ。大森美香監督の『ネコナデ』(2008)は、同僚をリストラする汚れ役を担わされた人事部長が、捨て猫と出会ったことで自らの生き方を見つめ直す物語。非情だったはずの男が、か弱い子猫を匿おうとオロオロする姿が絶品。NHKの朝ドラ『ゲゲゲの女房』(2010)、市井昌秀監督の映画『箱入り息子の恋』(2013)など、ヒロインの父親役を演じることが多いのも、娘の行く末を案じてオロオロするレンさんの姿が、たまらなくチャーミングだからだろう。まさに平成の笠智衆！

庵野秀明総監督の映画『シン・ゴジラ』(2016)では、「巨大生物襲来」の第一報を受ける総理大臣役。NHKスペシャル『原発メルトダウン』(2016)の再現ドラマでは、福島第一原発の吉田所長役。未曾有の危機に直面した日本人の「代表選手」として、レンさんは全力でオロオロしていた。「オオスギ・レン」の喜怒哀楽を、現代の私たち日本人そのものとして、海外の観客にも見ていただきたい。そう、オオスギ・レンは1億人いるのだ！

参考図書=『現場者—300の顔をもつ男』大杉漣(マガジンハウス、2001年)



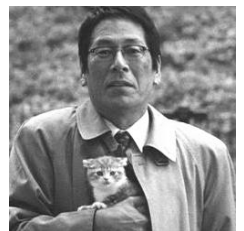
兄貴の嫁さん (1984)



ソナチネ (1993)



ポストマン・ブルース (1997)



ネコナデ (2008)



ゲゲゲの女房 (2010)



原発メルトダウン (2016)